

アメリカ社会を経験して

小野 幸二

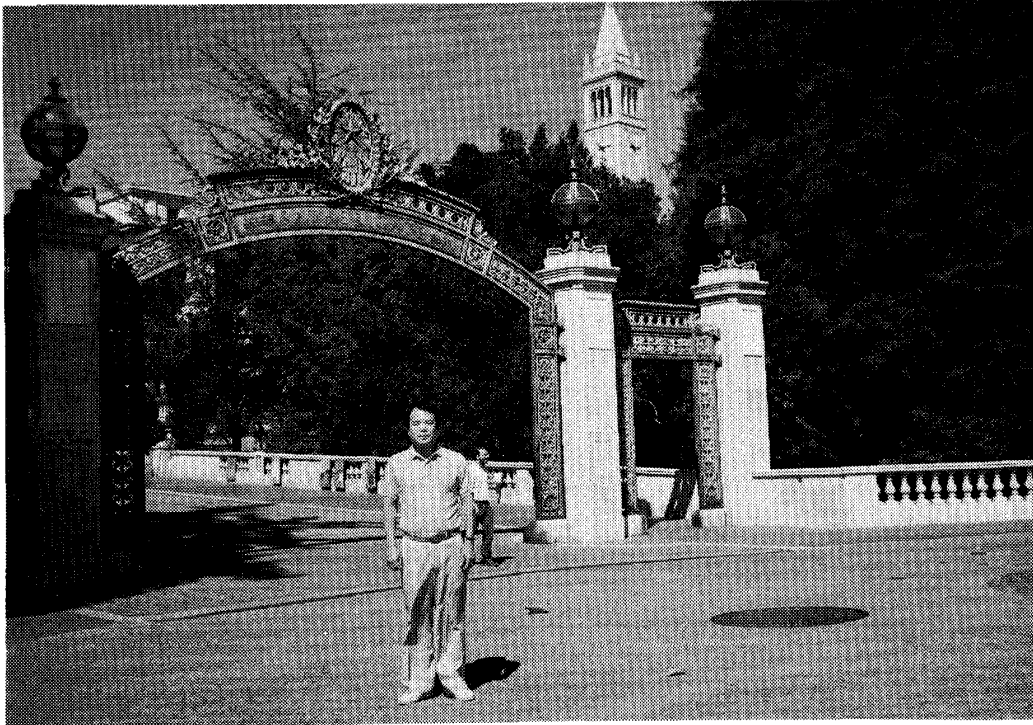
(大東文化大学法学部教授)

1 学園都市バークレー

私は、昭和63年8月より平成元年9月までカリフォルニア大学バークレー校ロースクールの客員研究員として、サンフランシスコの近くにあるバークレー市に滞在した。1年と1ヶ月に及ぶアメリカでの生活はたいへん楽しいものであった。50を過ぎての留学は苦しいものと聞いており、現にそう感じたこともないではなかったが、それは大したことでなかった。大学の先生や職員はたいへん好意的で良い研究環境を提供してくれたし、学生たちも陽気で親切であった。大学を中心に南北と西に開ける学園都市バークレーは大変ユニークな街である。映画「卒業」や「いちご白書」の舞台となり、1960年代後半における学生運動発祥の地となったバークレーは更に自由なムードと活気あふれる町である。昼ともなると大学の正門付近に学生たちや市民が集まり、思い思いに自己の意見を述べたり、議論したり、神の教えを説いたり、現代世相の危険性を説いたりしている。一見牧師風のA氏と胸にブラジャーをつけ女装したヒッピー風のB氏は有名である。彼らはほとんど毎日正門前にやって来て、A氏は携帯用マイクで歌を唄って小銭を集め、B氏はいつも学生たちと何事か言い合っている。彼らはとうとうラジオで紹介され、観光用の絵ハガキにまで登場する羽目になった。大学に来て彼らを知らなければまさしくもぐりである。

ボランティアの進んだ町であり(朝食などが配られている)、リベラルな考えを持った市民の多いこの町は、気候の良いせいもあってホームレス(全米では400万人、親類などに居る隠れホームレスは1,400万人もいるといわれる)か乞食風の人々が多く集まり、町を歩くと一日何回も“チェンジ プリーズ”と言って、小銭を請われる。一方では、この大学がカリフォルニア大学の本校であり、15人のノーベル賞受賞者を出し、水準の高い3万人の学生を擁するだけあって、大学周辺の町には知的雰囲気漂っており、カフェでは朝から晩まで猛烈に勉強する学生の姿が多く見られる。私にとっても、バートの駅のあるシャタク、ユニバーシティ、大学正門南側のバンクロフト、デュラント、テレグラフなどの通りは思い出深い通りである。こういう町の中で多くの友人を得た。ネイティブの人は勿論、中国人、インドネシア人、タイ人、スイス人、ドイツ人、フランス人などと知り合いになり、一緒にパーティや旅をした。バート駅近くにある「コーヒーショップ」というレスト

ランで知り合った戦前に移民してきたという日系2世のおばさんの紹介で日系60人とリノへ旅したときにはいろんな苦勞話が聞けて大変勉強になった。サンクスギビング、ハロウィン、クリスマスなどの祝日は大変楽しいものであった。



カリフォルニア大学バークレイ校のセイザー・ゲート前で

2 アメリカ大陸をドライブ

しかしなんと言ってもアメリカを満喫できたのは、渡米した家族と一緒にアメリカ西部、カナダ、メキシコを旅行したときであった（長女はテキサスのブルーリッジ・ハイスクールからバークレー・ハイスクールに転校して来ており、私と一緒に住んでいた。アメリカは入学も転校も簡単であり授業料も無料でたいへん鷹揚な国である。私はアメリカに感謝の気持ちで一杯である。公立高校は危ないと聞いていたが娘に関する限りそうではなかった）。自動車で7000キロを17日間で走破した（車は40万円で買ったニッサン・セントラの中古車を使った。日本車は故障がなく、格安ということで人気があり、町にはたくさんの日本車が走っている）。サンフランシスコを後にフリーウェイ5号線を一路北上したのは89年の7月25日早朝であった。オレゴン州の美しい山シヤスタの麓に1泊し、27日にワシントン州のシャトルに着き2泊してカナダのバンクーバー、ビクトリアを経て、残雪やレイクの美しいカナディアンロッキーを越え30日にジャスパーに泊まり、翌日はエドモントンに入り、友人のアルバーター大学カーター・パル教授に会い大学を見学して一泊し、翌日はあ

のオリンピックのあったカルガリーを見て、一路南下し、8月2日はカナダに別れを告げアメリカのアイダホ州に入った。3日は噴煙を上げる熱泉や原始林に囲まれた湖や溪谷で有名なワイオミング州のイエローストーン国立公園を廻って南下を続け、ユタ州のソルトレイク、アリゾナ州のグランドキャニオン、ネバダ州のラスベガスを経て、8月8日13日振りにカリフォルニア州に帰ってきてロスアンゼルス、サンデエゴで少し休養し、10日にはメキシコのティファナを訪ね、Uターンして8月11日バークレーの自宅に帰った。運転免許を取ってからまだ1年半しか経っていないし（私はこの留学のため、わざわざ渡米直前の夏休みを利用して免許を取得したのであったが、長期滞在は現地の免許がいいということで改めてカリフォルニア州のライセンスを取得（試験はペーパーと実技に分かれているがいずれも日本よりずっと易しい）した）、しかも1日10時間くらい1人で17日間ずっと運転したので途中が心配であったが、無事故、無違反でほっとしたことであった。

アメリカ大陸でのドライブ、とくにフリーウェイでのそれはたいへん壮快である。地図1つあればアメリカのどこにでも行けるから諸君も機会があったら1度試みたらいい。しかし、事故や交通違反については十分気をつけて貰いたい。参考のために車について少し書いてみよう。レンタカーはどこでも容易にかつ低料金で借りられる。左側運転座席、右側通行は1日乗り込めば慣れるのでそう心配はいらないと思う。しかし、交通違反のほうはかなり取締りが厳しいので気をつける必要がある。駐車違反は摘発専門車が居てメーターが下りるのを待ってチケットを張りに来る。罰金にはランクがあって低いほうが2千円、シスコのダウンタウンなどでは5千円も取られる。市や州の財政源となるのである。私は滞在中総額5万円位払った。市財政に大いに貢献したわけである。ベイエリアでは何回か2重駐車や、徐行などで止められ、そのたびに国際運転免許証を提示して難？を逃れたが、フリーウェイではそうはいかなかった。ベイの周辺には観光名所が多い。スタンフォード大学やグレートアメリカ、ラッコの故郷であるモントレイ、クリント・イーストウッドが市長であったカーメル、シエラ・ネバダ山脈のほぼ中央にあるヨセミテ国立公園などを訪ねたとき幾度もフリーウェイに乗ったが、1回目は50キロオーバー、2回目は30キロオーバーでそれぞれチケットを切られ、総額5万円を払い、今度は州の財政を潤した。飲酒運転の取締りは大変厳しく酒を飲んだら絶対運転しないほうがいいと聞いていたが、幸い私は1度も咎められなかった。

3 日本の留学生たち

バークレーはサンフランシスコからバートで30分ということもあって、良く日本人の観光客が訪れる。大抵は大学の生協が目当てである。大学のマーク入りTシャツなどたくさ

ん買い込んで帰る。夏になると大学付属の英会話学校にたくさんの研修生が来て、良く団
体で町を歩いている姿が見受けられる。勿論町には日本人留学生もかなりの数いる。これ
にはグループがあって、1つは大学や銀行などからビジネススクールなどに派遣され学位
取得を目的としているものであり、彼らは極めて優秀で良く勉強する。2つはU・C・バ
ークレーの学生である。これもトーフルで高得点を得たものであるから優秀であるといえ
よう。今アメリカの大学ではアジア系米国人の進出が目覚ましく、各地の大学は入学者数
に一定の割り当てを課しているが、昨年の6月加州選出の議員らがアジア系入学規制は不
当であるとの決議案を米議会に提出した。3つは、トーフルをパスせず無試験同様のコミ
ュニティカレッジか学生数100人か200人位の小さな私立大学（日本でいえば専門学校程度
の規模）に通っているものである。このような大学であっても真面目に勉強して卒業さえ
すれば、かなりの実力がつくと思う。米国の大学での単位取得はかなりむずかしいからで
ある。要は本人のやる気の問題であるが、そのような努力もせずただ英会話学校を渡り
歩いているのでは留学の実は上がらない。大学さえ出れば最近では日本の企業も現地で入社
試験を行っているので将来の展望が開けると思う。頑張って貰いたいものである。4つ
は、2、3週間とか数ヶ月ホームステイにやって来る人たちである。ホームステイは家族
の一員として家庭に入り、アメリカの生活を中から体験できるから大変有益である。また、
受け入れホストファミリーは、日本を知りたい、日米親善に少しでも役立ちたい、という
善意の人達だから、多くはボランティアであるが、業者や英会話学校とタイ・アップして
金を取るところもある。大体1ヶ月2食付き7万円位であり、こちらのホストファミリー
は簡単に見つかる。ホームステイはいつもうまくいくとはかぎらない。文化・習慣の違い
から誤解が生じたり、英語が分からないためお互いにいやな思いをしたりして、ホストフ
ァミリーを飛び出す者も間々いる。治安は日本よりずっと悪い。危険な場所には足を踏み
入れないほうがいい。ダウンタウンの特定の一角や海岸寄りには危ない。人通りの少ないと
ころでの女性の一人歩きも危ない。太陽が落ちたら一人で歩くなといわれるくらいである。
昨年の6月サンノゼで名古屋から留学していた女性が殺されたが、彼女は暗い公園を一人
で歩いていたという。現地の人から見ればこれは論外なのである。強盗やスリにも気をつ
ける必要がある。ニューヨークでの話ではあるが私もスリに遭った。散歩中、4人の女性
スリ集団と出会い、7人中2人があつという間に拘られた。そのテクニックはまことに絶
妙である。私も財布と航空券を拘られたが、現金を抜かれた財布は後で送り届けられた。
泥棒にも仁義ありというべきか。

ドラッグにも気をつける必要があろう。先月“勝新”がハワイ空港で麻薬所持の疑いによ
り逮捕されたと報道されたが、米国では麻薬は簡単に手に入るようである。娘の話によ

るとハイスクールの教室内でも売り買いが行われているとのことである。先生はみて見ぬふりをしているようであり、中学生もドラッグをやっているようである。入手が容易であっても絶対に手をつけないことが肝要である。

4 アメリカ人の生活振り

私は以前から日本の経済は景気がいいというのがアメリカと比べて本当にそうなのだろうか、ということについて興味を持っていた。そこで現地の人の生活振りを観察したのであるが、商品の出回りやスーパーでの買い振り程度では判断がつきにくい。日本人にとっては円高のせいで物価が安く、大変生活がし易いので、一見日本人が豊かなように見えるが、実はそうではなく社会資本や社会保証制度が充実し、そのうえ物価が安いということは高度な生活が営めることを意味している。たとえば大学教授の年収は1千万円に届かず、日本よりは少ないかも知れないが（一般的に言ってサラリーマンの年収は日本より少ないと思う）、物価が相当安いので生活の内容は米国が上位と感じた(日系米人の年収は米国民の平均年収よりかなり高いが、これは最近日系米人が米国で評価されるようになった原因の1つでもある)。ただ米国は貧富の差が甚だしい。カリフォルニアは1年中を通じて暑い(しかし夜は相当冷える)というか、温暖であるのでラフなスタイルが多いのであるが、それでも一般的には庶民はそういう物は着ていない。車検制度がないせいもあろうが、町には相当古い車が、かなりの数走っている。では経済学的にはどうか。私は向うにいるときそれに関する本をかなり精力的に読んだ。最近、米国の未来学者、エズラ・ボーゲルの著書「ジャパン・アズ・ナンバーワン」に見られるように日本礼賛の本が圧倒的に多いが、それらはおしなべて日本は世界で指導的な経済大国であるという。曰く、①日本は世界最大の債権国である、②アメリカ政府は財政赤字の30パーセントを直接日本人の投資家に頼っている、③現在世界の10大銀行のうち、貯金残高では10行のすべてが日本の銀行で占められている、④日本の「4大」証券会社は、現在世界の4大証券会社でもある、⑤日本の銀行はアメリカの市中銀行の資産の10パーセントを押さえている、など。「YEN/円がドルを支配する日」の著者ダニエル・バーンスタインは、この10数年のうちに日本の「円」が世界の基軸通貨となり、アメリカは日本の金融支配下に組み込まれていくであろうという。未来学者アルヴィン・トフラーは、日本人が世界で最も未来志向的な国民であるといっている。昨年の5月アメリカの「世界政策研究所」が行った日米比較に関する世論調査では軍事力、生活水準では米国が優位に立ち、経済力、技術力、勤勉度などでは日本人のほうが優れていると考えているという。また、米国民の4人のうち3人が、米国の安全保障に対する最大の脅威はソ連の軍事的脅威より日本の経済的挑戦であると考えているとい

う。しかし最近“日本は米国より劣る”という本が出版されて今やアメリカで話題を呼んでいる。これはジェームズ・ファロー著「モア・ライフ・アス（もっとわれわれ自身のように）－偉大なアメリカの再現」で、著者によれば日本の生活水準は米国を大きく下回り、イタリア、フランスより下だと指摘、住宅も狭い上に下水施設が完備していない家もあり、道路事情も悪く公園用地も少ないと痛烈に批判している。著者はまた、日本で最も強調されているのは日本人の「単一民族性」だと述べ、著者が初めて日本の公衆浴場に入ったとき、他の日本人が気味悪がって出て行ったエピソードを紹介、これに対し多民族国家、開かれた社会の米国は絶えず文化的変化を遂げており、これが日本にはない強さの源流になっていると強調している。考えさせられる問題である。

5 大統領選挙と天皇崩御

1年間に及ぶ滞米中いろんなことがあった。もっともラッキーだったのは、1 昨年11月行われた大統領選挙に出合ったことであつた。この大統領選挙は、正確には大統領選挙人の選挙（エレクトoral college）のことであり、カリフォルニア州の選挙人団は45人で全米最大である。大統領選挙のときには、同時に連邦や州の上院議員、市長や市議会議員の選出のみならず州の財産税やタバコ税の課税についてまでイエス、ノーの形で投票する（投票項目は数百に及び、その説明書は1冊の本となっている）。昨年10月17日のサンフランシスコ・ベイエリアの地震で一部が落下した、あのベイ・ブリッジの通行料金の値上げ（75セントから1ドルへ）も投票によって決められた（私はこのベイ・ブリッジやあのサンドウィッチとなったオークランドのフリーウェイも車で四六時中走っていたので、地震がもう少し早く来ていればあるいは私も事故に巻き込まれていたのではないかと、ひんやりしたことであった）。日本でも固定資産税や高速道路の通行料金を25%も引き上げることの可否が国民投票で問われたら、日本人はイエスと答えるだろうか。米国人は、その必要性を認めれば、たとえ自分が何かを負担することになってもイエスと答える。これこそ真の民主政治であると感じ入ったことであった。日本では総理大臣が竹下から宇野、海部と変わり、天皇が崩御なされた。いずれもアメリカのマスコミはこぞってこれを報道した（一般的に言って、アメリカでは日本の事はあまり報道されないと新聞などで読んでいたが、カリフォルニアにかぎっていえば私はそうではないと思う。テレビ、新聞、ラジオは毎日のように日本の事を話題にしており、政治、経済のみならず音楽なども取り上げている）。特に天皇崩御については特集番組が組まれ、日本の歴史、現在の天皇家についての紹介などがあり、世界のニュースも東京から1週間位アメリカの家庭に流された。こんなことは、日米史上かつてなかった事であった。新宿御苑で行われた「大喪の礼」は、ブッシュ大統

領も参列したこともあってテレビはかなりの時間を割いて報道し、古式にのっとり葱華輦（そうかれん）に載せられたひつぎの葬列は多くの新聞に掲載された。天皇について米国人はどう考えているか。昨年2月、「ニューヨーク・タイムズ」の行った世論調査によれば、3分の2の米人が昭和天皇に戦争責任があると答えており（これに対し日本人は3分の1）、ブッシュ大統領の大喪の礼への出席については63%が適切としているが、65歳以上の回答者は41%と低く、これは戦争経験世代にある米人の天皇「ヒロヒト」への抵抗感がうかがわせるもの、と報じている。新天皇については、有力月刊誌「バニティ・フェア」（1989年3月号）が16頁に及ぶ大特集を掲載し、明仁天皇、美智子皇后両陛下は新しい時代を迎えて進路を模索する日本のシンボルであると述べている。

以上、徒然なるままに書き連ねたが、これはほんの一部を述べたにすぎない。いろいろな事を経験し、文化や習慣の違いを肌で直に感じ、感動し、驚き、そしてアメリカの何たるかを少しは理解できた。貴重な体験であった。しかし法律文化については、ここではあまり触れなかった。比較法的には一層感じ入るところがあったが、それについては大東新聞41号「21世紀へ アメリカの模索」およびジュリスト947号「アメリカで今起きていることー米国最高裁の保安回帰と前進」を参照していただきたい。